

魅力ある県立高校づくりアドバイザー会議（第3回） 議事録

- 1 日 時 令和6年9月12日（木） 午後3時開会
午後5時終了
- 2 開 催 集合型及びオンライン参加型
- 3 出席アドバイザー
益川弘如氏、小栗貴弘氏、渡辺大輔氏、澁川幸加氏、奥平博一氏、
萩原裕子氏、内田ひとみ氏、澤田修氏、関根弘子氏、船橋幸代氏、
中村敏明氏、江原勝美氏、池田靖氏、服部修氏
- 4 事務局 魅力ある高校づくり課
- 5 協議等 魅力ある県立高校づくりについて
 - ・今後の普通科の在り方について
 - ・教育環境について

依田高校改革統括監 それでは、議事に入ります。まず、青山学院大学教育人間科学部教育学科教授の益川様より御講話を賜りたいと思います。テーマは「学ぶ力を引き出し、高める学校教育について」でございます。益川様、どうぞよろしくお願いいたします。

益川氏 青山学院大学の益川です。私の研究分野に基づきながら、「学ぶ力を引き出し、高める学校教育」について、お話しさせていただきます。

まずは自分の専門分野についてお話しすると、認知科学、学習科学、教育工学を専門としております。認知科学というのは、「人はどういうときに一番学びが深まるのだろうか」、「人の知」について解明する学問です。私は教育学をフィールドの中心としておりますが、その他にも、人工知能、文化人類学、言語学、神経科学などの分野の研究者が集まって研究しています。最近では生成AIなども話題になっておりますが、学習科学と呼ばれる基礎研究をもとに、小・中・高・大の様々な学校現場で、そういった理論を応用して、授業改革、子供たちの学びの深まりを進めています。ICTの活用についても、いろいろな人とチームで取り組みながら、様々な資質・能力を発揮しながら学びを深めていく、そのための支援研究などを行っているところに所属しています。私の指導教員は三宅なほみ先生で、埼玉県教育委員会ともかなり関わっていた方ですが、残念ながら2015年にお亡くなりになりましたが、お亡くなりになる前に他の研究者と一緒に本をまとめまして、その最終章を三宅先生に寄稿していただきました。その一文が「人は小さい時から正解を与えられ、それを覚えることだけを求められ続ければ、潜在的に自分で考え答えを自ら作り出す能力をもっていたとしても、この潜在能力が発揮する機会がほとんどないから、自分で考えようとはしなくなるだ

ろう。」というものです。やはり、学んでほしいこと、先生も教えたいことはたくさんあると思うのですが、それ自身を自分で考えて作ってもらう、そういう生徒を育てつつ、子供たちの能力を高めて、育てて社会に出していくためには、様々な学習環境、教育環境を用意することが今後ますます大事になってくると思います。

例えばそういった枠組みの中で、現行の学習指導要領でも、総合的な探究の時間における生徒の目指す姿が書いてあります。自ら課題を設定して、情報を集めて、整理・分析し、まとめて表現するということを繰り返しながら、高めていくという話です。これは、生徒が興味のある専門分野だけでなく、各教科の学びにも共通することかと思えます。

私の尊敬する先生の一人に、佐伯胖先生がいらっしゃいます。私と同じ認知科学者で、80歳を迎えた方です。その先生が、インターネットが家庭で使えるようになった時期の1997年に、岩波新書の『新・コンピュータと教育』の中で、こんなことを言っています。「将来、きっと学校では、一人一台コンピュータを使うような環境になるだろう。でも、この当時の調べ学習がそのまま学校に広まっていったらダメなのではないか。」といった提言です。少し紹介しますと、「インターネット利用の学習になると、「ともかくデータを集めたら、こういう結果になりました」という「調べ学習」のオンパレードになる。こういう「調べ学習」というのが、わが国の「お勉強」の伝統であり、小中学校どころか大学生の卒論、さらには、学者の「学術論文」にまで行き渡っている。こういう「お勉強」の文化の土壌には、インターネットというのは格好の道具になる。」ということを言っています。様々な専門教科を学ぶにしても、単に拾ってきて整理するだけでは決して深い学びにはならない、といったことを言っています。

「だから、何なのだ」「なぜそうなのだ」「ほんとうに（つねに、どこでも）そうだとと言えるのか」「もしもそうだとしたら、今のこのわたしはどうでなければならないのか」というディスカッションがあまりにも弱い。」という書き方をしています。きちんと学ぶのであれば、学び手である生徒たちが、いろいろな人と対話しながら「これが大事だ」といったことをしっかり持つていくことで、将来社会に出て行っても、新しい問題についてもしっかり考えて、課題解決しながら新しい物事を生み出していく人に育っていくのかと思えます。

トロント大学の名誉教授で学習科学者のカール・ベランターという方がいます。その方に、一番大事な力を一つ挙げてくれと言った際に「トランスリテラシー」というキーワードを挙げました。これはどんな力かと言いますと、「新規の課題解決」です。インターネットなどいろいろな情報がありますが、事実をもとに主張していても、事実自体が切り取られているなど、本当に様々な判断力を求められます。そういった多種多様で断片的な情報と自分が持つ深い知識を統合し、自分なりの考えを作り上げていくということです。学ぶといっても、単にこれが答えだということをしていてもダメで、これは生成AIの活用についても言えることですが、そうではなく、いろいろな情報を組み合わせながら、これが解決策なのではないかと自信を持って言えるような情報の創造能力「答えづくり」がとても大事になると思えます。

これは持論ですが、「学力の三本柱（知識・技能、思考力・判断力等、学びに向かう力・人間性）」とよく言われていますが、上から知識・技能を教え込んで、それから「さ

あがんばれ」と言っても、がんばってくれるか分かりません。そうではなく、「知りたいこと、解決したいこと」という問いをしっかりと持って、様々な情報にアクセスする。それは、普通科であれば教科書の内容かもしれませんが。でも様々な教科を横断的に紡いで、これが答えなのではないかと自ら答えづくりをしていく。それがまさに「生きて働く知識・技能」を生み出していくような学習活動につながると思います。

私の研究領域では、そういう学びの姿を学校の中で実現していくことが大事だと定めております。答えは、先生から教わるというより、自分で作っていくものだという事です。その答えは、クラスの仲間や外の様々な人との対話、話合いの中で創り上げていき、答えが見えてきたら次の問い、課題を見出して、更にその先の解決に向かっていく。そして、その答えの出し方について、人との違い、その多様さに価値を置く。価値を置きながら解決策を作っていくということを、教科の学びでも探究的な学びでもたくさん経験していきながらその領域を深めていくことが、その先の社会への接続を見据えたときに、耐えうる資質・能力の育成につながるのではないかと考えています。

そういった学び方の一つとして、協調学習という考え方では埼玉県は全国の中でも最先端にいると思っています。例えば、複数の情報を皆で組み合わせて答えを生み出していく「知識構成型ジグソー法」の学びを通して、教科についての理解と資質・能力の向上を進めていっています。そういったことも大事にしながら、更に埼玉県の高등학교が発展していくことができると良いと思います。

私の研究領域では、目指すべき学習ゴールとして、様々な場所に学習成果を持っていける「可搬性」、必要なときに安心して学んだことが使える「活用可能性」、更に生涯をかけて学びを発展させていく「持続可能性」といった観点も重要かと思っています。

同時に、現行の学習指導要領では、教科横断で育てる資質・能力として、「言語能力」、「情報活用能力」、「問題発見・解決能力」などを定めています。これは、一つ一つの教科の中だけでなく、高校3年間の教育課程を通して育てていくものです。

私自身、埼玉県立総合教育センターの「教科等横断的な視点に立った授業づくりに関する研究」にも関わって助言等をさせていただいております。そこでは、一つの教科の中に留まるのではなく、例えば、学習の基盤となる資質・能力として「言語能力」を高めるのと同時に、学習指導要領で定められている、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力としての「主権者として求められる力」を高める手法として、数学、音楽などの芸術教科、情報、理科など様々な学びを横断しながら取り組んでいくことによって、教科の内容理解の幅も広がりますし、組み合わせで新しいものを見出していく練習にもなります。今後、そういうカリキュラムがどんどん展開されていくと良いと思います。

そういった意味では、専門学科でも普通科でも、魅力ある学習内容、生徒にとって有意義な学習内容にするためには、教科の学習、探究的な学習、プロジェクト型学習などを色々組み合わせながら、深い学びを実現するカリキュラム構成が大事ではないかと考えています。

学習科学の分野においては、探究学習で重要な要素として六つ挙げております。「駆動質問 (Driving Questions)」というのは、現実世界と結びつき解決していくもので

す。普通の教科でも解決可能ですし、専門学科の学びでは、まさに実学と結びついていきますので、いろいろなものを作っていくことができるかもしれません。そういった中で、「探究活動を頑張りましょう」だけではなく、きちんと中身を深めていく。ここでは、単に調べ学習をして終わりではなく、自ら手足を動かしながらデータを集めて分析する。大学ではデータサイエンスが必須になりつつありますが、そういったものに接続していくような形で参加する。あとはチームで行うこと。最終的には個人で成果を発表した方が良いと思いますが、その間には、いろいろな人と協力しながら、ときには議論しながら自分の成果物を創り上げていく。一人一台端末の環境も整ってきていますので、様々な情報技術を使いながら、データの蓄積、議論、情報の共有といったことをやりつつ、最終的には「成果物 (Artifacts)」を創造する。アクションを起こしていく。そういった活動が高校の中で組み込まれていくと良いのかなと思います。

私が昨年度、聖心女子大学で担当した集中講義では、航空会社とコラボして、駆動質問「VRなどの情報通信技術は人の学びを変えるのか？」というプロジェクト学習に取り組みました。羽田空港の近くにある、パイロット、CA、整備士等の総合研修センターをフィールドにしましたが、最近は様々な情報技術が用いられています。例えば、CAの出発前のチェックの研修は、VRを用いて行ったりしています。他にも、実機をもとにしたシミュレーションを体験したり、現場ではデジタル化がどのように進んでいるのかを学んだり、またそれだけではなく、おもてなしの心も大切にするために茶室があるということも学んだりしました。体験するだけでも確かに楽しくて学びもあるのですが、そこでは深い学びにまでは行きつきません。ですので、カリキュラム、学びの流れを工夫しています。最終的な成果物として「航空会社の方々に新たな学習環境をプレゼン提案」というゴールを設けて、そこに航空会社の方をお呼びして講評をいただく。体験だけでなく、「VRの心理学」の研究文献をジグソー法で読み解くことを事前に行った上で体験活動が入って、その後、「学習環境デザイン研究」の研究文献をジグソー法で読み解き、体験したものとジグソー法で学んだことを包含しながら議論をしつつプレゼンするというのを、集中講義でやりました。普通高校でも、様々なカリキュラムを設定していくときに、意図的に様々な教科の学びを入れることも検討しながら進めていくことが大事になってくると思います。

そうなってくると、いろいろな仕組みを作る以上に大事になるのは、先生方一人一人が、生徒たちのためにこういうことをやりたいということを考えていける機会と時間的な余裕と環境だと思います。仕組みだけ作っても、デザインする余地がなければ、結局は生徒たちに体験させて終わりということになってしまったり、実学志向であっても、事実を提供して終わってしまう。それではとてももったいないので、こういったカリキュラムを作っていけるような全体設計を是非検討いただければと思います。私からは以上です。ありがとうございました。

依田高校改革統括監 益川様、ありがとうございました。アドバイザーの皆様から御質問等がありましたらお願いいたします。益川様、可能な範囲で御対応いただければと思います。はい。船橋様、お願いいたします。

船橋氏 コロナ禍を経験した子供たちがちょうど中学生、高校生になっています。社会科見学もできず、それこそVRで社会科見学をしてきた世代です。うちの子供もその

世代ですが、やはり実体験をするということが一番だと思いますが、見て満足して、そこから動こうとしない世代にもなっているのかなと感じます。実際にその場に行って経験して感動して動くということを面倒に思ってしまう世代になってしまっているのではないかという点も、親としては懸念しています。感じて、その後の「動く」につなげるまでの力を付けさせるには、どういうところで導いていければ良いでしょうか。

益川氏 お話のとおり、最終的に具体的なアクションまでつながっていくことがとても大事だと思います。OECDの「Future of Education and Skills 2030」でも、ウェルビーイングに向けて、一步踏み出していく力が大事だと言われています。いろいろな事柄をなんとなく受け止め、様々な人の立場に立って考えてみたり、疑問を持つという経験が足りないのかと思います。学校教育の枠の中で、様々な立場に立ってみて、「あなただったら問題ないかもしれないが、こういう人だったらどうだろう」、「なぜ今、こういう現状になっているのだろうか」などいろいろな問いを出し合いながら高めていけるようになると良いと思います。そこには当然、ファシリテーターとして先生がいて、似たような視点を持っている友達同士、クラスメイトになるかもしれませんが、そういう仲間が必要に応じて調査、議論、新しい情報に触れる。そういった中で育んでいくしかないのかなと思っています。

船橋氏 ありがとうございます。

依田高校改革統括監 その他、いかがでしょうか。はい。服部様、お願いいたします。

服部氏 大変貴重な御講話をいただき、ありがとうございました。体験と学びの往還について、1点教えていただければと思います。本校は専門高校なので、実学重視のところがございます。体験して終わりではなく学びとの往還という観点と、先ほどのお話の中であった、課題の設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現のサイクルの中で高めていくという観点は、イコールなのか相違点があるのか、その辺りを教えていただけると有り難いです。

益川氏 イコールと考えて良いのかと思います。同時に、学習内容と演習・実学との往還の観点でいうと、事実、基礎知識の学習についても、子供たちがうまく対話しながら、「これってこういう意味だよな」とか「こういうことも知っているところこういうところに応用できるね」など、そういった豊かな学びの中で往還していけるととても良いサイクルになるのかと考えています。

服部氏 そうすると、そのサイクルというのは、単純なスパイラルではなく、仲間との学び合いなど横にも広がっていくということでしょうか。

益川氏 そうですね。実態はもっと複雑かと思います。

依田高校改革統括監 その他、いかがでしょうか。私から1点、よろしいでしょうか。実際に現場の先生方と話をすると、どうしても調べ学習で終わってしまったり、全ての授業で探究や協調学習をやるのもなかなか負担があって難しいということがあります。そうすると、年間の授業の中で、どの程度、探究活動や協調学習などを織り交ぜていければ効果的なのか。その辺り、量的なものはいかがでしょう。

益川氏 全体として、メリハリが大事だと思います。しっかり繰り返し取り組んで流暢にしていくといった学習活動も大事ですが、生徒を中心に見たときに、知りたいこと、

考えたいことがちゃんと上位にあって、そのために話し合う、そのために練習する、そのために考えるといったように、構造化されていけば良いのではないかと思います。依田高校改革統括監 ありがとうございます。その他、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。改めまして、益川様、貴重な御講話をいただきありがとうございました。それでは、資料3「今後の普通科について」に移ります。事務局から説明をお願いします。

事務局 (資料3「魅力ある県立高校づくりについて～今後の普通科の在り方について～」説明)

依田高校改革統括監 事務局から説明があったとおり、県立高校の場合、やはり普通科が一番多い学科となります。この普通科の学びをどうするかということは、県立高校の在り方を考える上で非常に重要な位置を占めます。スライド14の論点なども含めて、御意見をいただければと思います。スライド15を見ていただくと、普通科の学びと言いながら、実際は様々な科の名称を使っている他県の例もあります。そういう意味では、普通科という科の名称自体が解体されつつあるようにも思っております。そういったことも含め、高校における今後の学びについて御意見をいただければと思います。いかがでしょうか。それでは、普通科と企業、社会という視点でまずは御意見をいただきたいと思います。内田様、専門学科については前回御意見を伺ったところですが、普通科から企業に入る生徒も御覧いただいている中で、企業の視点から、こういった学びがあった方がよいなど、普通科の学びについて何か求めることがあればお願いしたいのですが、いかがでしょうか。

内田氏 お答えになっているか分かりませんが、女子高生のキャリア教育プログラムを実施しているNPO法人があります。数年にわたって取り組んでいるということですが、高校1年生から3年生までの参加を求め、100人を超える女子高生を一堂に集め、キャリアをどうデザインしていくかを学ぶプログラムです。第2回目は「自分の強みを知る」という内容でした。ストレングスファインダーというアセスメントですが、話が上手、人に気を配れる、放っておいても自ら調べ物をしてしまうなど自分の持っている特徴を分析し、我々のような立場のグループコーチと一緒にあって、2時間ほどその結果について対話を深め、自らの強みとキャリアを考えるなど一緒にお話をさせていただきました。たまたま私が参加したグループの方の視座が高かった、視野が広がったのかもしれませんが、実体験から薬物撲滅に取り組んでいきたいとか、臨床検査技師になりたいなど、かなり具体的な話をする生徒もいれば、自分の特長を社会の中でどう発揮していくことができるのだろうか悩んでいる生徒もいました。これからの自分たちの生き方・在り方を考えている生徒が想像以上に多く、驚きました。逆に大変勉強になりました。

今、企業では、前例踏襲や上意下達の文化から、双方向や考えを安心して発信できる心理的安全性ある職場づくりが求められています。また、これは専門の先生にお伺いできればと思いますが、大学においては、今後、文系・理系という枠組みが、変化していくのではないかと思います。そういった意味で、普通科から社会にアクセスしていくときに、自分の可能性は限りなく広いということ、単なるキャリア教育ではなく、いろいろな側面からアプローチできるような仕組みができると良いのかなと思

いました。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。内田様から、理系・文系のお話をいただきましたが、普通科における理系・文系という枠組みについて、現状はどうなっているのか、また、今後はどのように捉えていくのか、事務局から説明をお願いします。

事務局 実態としては、1年生では全員が共通のカリキュラムで学び、2年生から文系・理系に分かれる学校が多いかと思います。中には、理系に進んだけれども文系に移りたいという生徒など様々あります。しかし、文系に進んだ生徒でも、探究的な学びにおいては分析能力などが必要な要素となってきます。そういった点は、事務局としても今後検討していかなければならないと考えています。

依田高校改革統括監 一つの課題と捉えているということですね。それでは引き続き、澤田様、いかがでしょうか。

澤田氏 全く議論の方向性は異なるかもしれませんが、少し思ったこととお話させていただきます。最近の状況はよく分かってはいませんが、普通科では大学に進学する生徒が多いと思います。大学受験に取られる時間を少しでも削減できないかと考えました。それができれば深く学ぶ時間が取れるのではないかと思います。例えば、指定校推薦の枠があるかと思いますが、少子高齢化の中で大学の経営にもいろいろなことが求められており、恐らく多様性のある大学が求められているのだらうと思います。そういった中で、大学の指定校推薦の枠を拡充し、場合によっては生徒全員が指定校推薦で大学に入学できる枠があって、もちろんその枠とは別に自分で受験して入学しても良いですし、そういったことができると、高校から大学までの7年間を見通したより長いスパンで、そして進学する大学と連携することができれば、様々な深い学びができるのではないかと思います。そういった特色を持たせることもあり得るのかと思います。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。では、大学受験の現状について、事務局から説明をお願いしたいと思います。益川様の御講話の中でも、探究学習の話もありました。そういった探究学習と大学受験の関係はどうなっているのか、また今後はどのような方向性で高校教育を大学受験にキャッチアップさせようとしているのでしょうか。

事務局 進学希望者が多い普通科の学校では、やはり大学受験をかなり意識しないといけない現状があります。大学受験も変わってきており、現状、大学に入るためには大きく三つの方法があります。一つ目は先ほどお話に上がった指定校推薦、二つ目は一般入試、三つめは総合型選抜です。総合型選抜はかつてAO入試と言われておりましたが、高校時代の探究活動やこういった活動をしてきたのかなど、学力を測る試験に捉われないような方法で生徒を合格させる大学が、国立大学も含め非常に増えてきております。

依田高校改革統括監 大分大学受験も変わってきており、そういった意味では澤田様からいただいた御意見は、一つの方向性として、大変示唆のあるお話かと思います。それでは、引き続き御意見をいただきたいと思います。中村様、例えば地域のニーズや中学校側から見た普通科についてなど、何か御意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

中村氏 お話にあったとおり、やはり高校は普通科に行こうと思っている子供たちが一番多いです。地域によっても異なると思いますが、大学受験に重きを置いている私立高校に行こうという子供たちも非常に増えてきている現状があります。自分が学んでいる知識や体験をたくさん持つことが、将来自分がやりたいことに向かってその可能性を広げていく糧や基になるので、決して無駄なことはないという考え方が良いと思うのですが、なかなかそうはならずとにかく高校に入りたい、目指す高校を目指すという現状もあります。中学生にとってはなかなか難しいところがあると思います。大学入試、高校入試という順番だと思いますが、宮代町の例を挙げると、小学校では英語の会話に非常に力を入れています。ところが中学校に上がると、どうしても高校入試を意識せざるを得ないので、書く、読むということに重きを置きます。小学校で会話を重視して学んできた子供たちは、高校入試に際して、小学校のうちからもっと書く、読むということをやっておきたかったと言います。目指すところと違うところに行ってしまうということで、高校入試は一つの課題かと思えます。

また、私が知っている企業の方とお話をすると、指定校推薦で大学に入学する生徒たちよりも、自分でがんばって試験を突破してきた生徒や部活動、サークル活動を一生懸命やってきた中で人間関係を構築してきた生徒の方が、非認知能力が育っていて、企業に入ってもすごく活躍できると言われます。そうすると、推薦入試とは何なのだろうかという疑問に思うところがあります。先ほど、推薦入試を積極的に活用することで、入試のための勉強以外でもっと子供たちが活躍できるのではないかというお話もありましたが、そこを高校教育の中できちんとやらないと、日本の企業を支える人間になっていけるのだろうかということが心配されます。大学がたくさんある中で、入試制度が子供たちの取り合い、どうやって生徒を集めるかという方向に走るとすれば、それは懸念されることかと思えます。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。確かに、小学校の英語のお話は切実かもしれません。英語のリスニング問題など、高校入試もいろいろと工夫をしてきたかと思えますが、その辺りは事務局からいかがでしょうか。

事務局 英語が大事というのは当然ですが、なかなか日本では英語を使う機会がなく、日頃から英語に触れてほしいという思いも含めて、今の入試制度となっています。

依田高校改革統括監 なかなか東京都のようなやり方を導入するのは難しそうですね。

中村教育長 国が目指しているところと少し違っているのではないかと思ったところです。

依田高校改革統括監 推薦入試についても話題に上がりましたが、事務局としてはいかがでしょうか。

事務局 県としては、中学校時代に、やりたいことに一生懸命取り組んでもらいたい、まんべんなく学んでもらいたいという思いがあります。その学びの成果を示すということで、今のところ公立の高校入試については、学力検査を全員に課しています。推薦入試を導入すると中学校で勉強しなくなってしまうのではないかといった御意見もいただきます。様々な御意見をいただきながら、現行の制度としているところです。

依田高校改革統括監 今いただいた御意見は、一度事務局でもしっかり受け止めていただければと思います。

事務局 中村アドバイザーからお話をいただいて、恐らく、高校入試でも大学入試でも、その制度を作った意図がなかなかうまく伝わっていないという難しさ、意識のギャップがあるのかと思います。長期的に見てこういう子供たちを育てていきたいからこういう施策をやっているんだということを、生徒や保護者と意識共有を図りながら進めていくことが必要だと感じた次第です。

依田高校改革統括監 はい。益川様、お願いいたします。

益川氏 総合型選抜についてですが、前任の大学では面接も担当しました。印象論になってしまうかもしれませんが、テーマややりたいことをしっかり持って大学に入学する生徒は、大学入学後にすごく活躍します。例えば高校のときの探究活動で、途上国の教育支援に興味を持ったから大学でも学びたいという学生は、一般入試で入ってきた学生を引っ張っていく存在になります。自身のボランティア活動と勉学を絡めて考えていけるので、勉学にもすごく熱心です。そういった状況もありますので、そういう意味では、最終的に一般入試で受けるにしても総合型選抜で受けるにしても、小・中・高を通して、やりたいこと、取り組みたいことを見つけていくことがとても大事だと思います。高校入試においても、近いからこの高校にしようではなく、自分の興味に合うような領域もテーマで扱っている高校だからこの高校にしようということかと思います。何か大学入試を包み込むような力を育めると、本当に活躍する子供として育てていくのではないかと思います。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。まさに普通科改革の肝になるお話かと思えます。それでは、越ヶ谷高校校長池田様、普通科高校における教科の改革、変革についてお話いただければと思います。

池田氏 これまで話題に上がっていた文系・理系についてです。なかなか難しいところがあるのですが、高校1年生が2年生になったときに理科や社会の各科目の教科書を何冊使うのかということをお早めに伝えておかないと、適切な教科書供給ができないという事情があり、1年生の6月くらいというかなり早い段階で、文系・理系の選択を迫られることがあります。2年生でも然りです。教科書の冊数を正確に把握するという点において、文系・理系をお早めに選択しなければならないという現状があるので、「とりあえず理系」にしておいて、後から文系に変更するという生徒もいます。保護者や世間一般からすると、文系・理系を考えるのは高校3年生の当初とか、具体的な大学進学を考える時期くらいかと思われがちですが、実際の高校生からすると、お早めに決めなければならないという実情があります。ですので、文系・理系の選択の時期をもう少し遅らせてあげられるようなことができると良いと現場では思っています。

大学受験について、話題に上がったとおり、一般入試や総合型選抜など様々な入試形態があります。この先どうなるかは分かりませんが、あくまで現状としては、一般入試を受けた人の方が忍耐強いのではないかという風潮が、生徒同士でも見られます。我々教員としても、最後まで入試をがんばらせたいという思いがあったりします。そうすると、最後までがんばるなら一般入試、そうすると人間性の涵養も目指せるという重石を自ら課す生徒もいるように思います。

高校入試についてですが、2005年から2010年くらいの5年間、埼玉県ではいくつかの学校で、「総合問題」といって、文系・理系問わず、例えば、当時、私の所属して

いた学校では、国数英の要素を取り入れた入試問題を導入していました。当時、これはとても素晴らしい入試だと思っていました。今思えば埼玉県は少し早すぎたのかなと思うところもありますが、そういった入試制度も埼玉県では過去にトライアルしていたので、学際領域や文理融合型などを視野に入れた入試の在り方も今後検討されてはいかがかと思えます。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。現場の貴重な御意見をいただきました。事務局は今の御意見をしっかり受け止めていただければと思います。はい。それでは関根様、お願いいたします。

関根氏 P T A 連合会の全国研修が先月、茨城県で開催されて参加してきました。他県の P T A の方のいろいろなお話を伺う機会となり、大変勉強になりました。公立高校は理系・文系に分かれる学校がほとんどですが、これは体験談ですが、行きたい大学が指定校推薦の枠にあり、その基準に達するためにもものすごく努力して勉強もがんばって評定も上げて、でもいざ応募するときになったら、「理系の生徒が優先」と言われました。うちの子は文系でしたが、先ほどのお話にもあったように理系・文系を決めるのもすごく早い時期で、ゴールデンウイーク明けくらいには希望用紙が配られました。まだ将来のことや大学のこともしっかり考えることもなく、なんとなく数学が得意だから理系かなということで一応提出はしたのですが、面談で先生が「文系の方が良いのではないか」ということで、自分の意思に抛らずに文系に変更しました。そのときはその行きたい大学の指定校推薦の条件などは全く知らない状況でした。自分が選んだ理系・文系に行けないのであれば、理系・文系に分ける意味はあるのだろうか。内容的にも大した差はなく、理系でかなり専門的な学びができるということでもなく、保護者からすれば、ただ分けているだけなのではないかと思えます。文系の生徒が、やっぱり理系に進みたいとか数検を受けたいといったときに、数学の授業がないので独学で勉強するか塾に行くしかないという生徒もいます。そういった意味でも、文系と理系の違いをもう少しはっきりさせないと、なぜこれで文系なのか、なぜこれで理系なのかということに分けている意味が分からない状況になってしまうと思います。他県の P T A の方とお話をすると、やはり似たような状況で理系の方が少なく、理系が多いと文系に流されてしまうという学校もあるようです。魅力ある県立高校づくりというのであれば、もう少しこの文系・理系を明確に分けられると良いと思いました。保護者としては、選ぶ時期が早いですし、一度決めたら変更も難しい状況ですので、その辺りも少し緩和していただくと、子供たちも自分の考えがしっかりアピールできて、自分の目標に向かってどんどんチャレンジできるのではないかと思います。

依田高校改革統括監 やはり理系・文系については少し課題がありそうですね。事務局はしっかり受け止めていただければと思います。その他、いかがでしょうか。はい。服部様、お願いします。

服部氏 私は普通高校での勤務経験がありませんので、ピントがずれていたら申し訳ございません。資料 14 ページの論点に「課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結び付けていく資質・能力を育成するために」とありますが、校長としては、それを叶えるためのカリキュラムの実施、探究学習においては指導というよりコーチングなのか

と思っております。そういったことができる資質・能力を持った教員を配置することが必要と感じます。先ほどのお話にあったとおり、教科書の関係上、早い時期に理系・文系を決めなければならないといった制度的な課題は脇に置いておくとして、内田アドバイザーからのお話にあったようなキャリア教育の視点で学びを広げていく、深めていく。そういったことを考えていったときに、高校入学後の早い時期に、多様な分野の学びに接する機会があれば良いと思います。総合学科の場合は「産業社会と人間」という科目で1年生の早い段階からキャリア教育の視点を取り入れています。普通科にもそういった視点が必要なのではないかと感じます。専門学科の場合は、多くの生徒がある程度のビジョンを持って入学し、高校でスキルを身に付けてその先に発展させていきますが、普通科ではなかなかそこまでのビジョンを持って入学する生徒は少ないと思いますので、やはり様々な分野の学びに触れる機会があると良いと感じています。

依田高校改革統括監 服部様の御意見にもあったように、普通科の生徒にどうやって目的意識を持たせていくかということが一つの観点としてあるかと思います。それについて事務局として何か考えはありますか。

事務局 益川アドバイザーの御講話にもありましたが、生徒に、いかに学ぶ意欲を持たせるか、そのスイッチを入れさせるかということに尽きるのかと思います。好奇心を刺激するような出会いや体験を学校生活の中でしていくことで、そこから自分がやってみたいことを探していくことにつながっていくのかなと思っております。現状としては文系・理系に分かれるところからスタートしますが、社会に出たときに、「私は文系なので計算はできません」では通用しないですし、そういった意味で、学際的な幅広い学びや、興味関心を高める上で様々な選択肢がある学校、子供の好奇心を刺激するような学校をこれから考えていかなければならないと思っています。

依田高校改革統括監 はい。それでは奥平様、お願いいたします。

奥平氏 普通科についてということで、N高校は通信制高校ですが、昨年度、高校から転学してきた生徒を我が校だけで約5,600名受け入れています。多くは普通科からの転学で、この数字に編入生は含みません。やはり一般的に言うと、今は高校に進むことが当たり前になっています。そういった現状の中で、先ほどから「目的意識」という言葉が出てきていますが、何のために普通科に入学したのか、それが不明な生徒が本当にたくさんいるのではないかと感じています。今の普通科に求められる役割というのは、これは中学校における指導にも大いに関係してくることかと思いますが、生徒たちの学ぶ姿勢をいかに変えていくかということかと思っています。益川アドバイザーがおっしゃっていたように、自ら学ぶ姿勢を持たせるためには、そのベースの部分がまだまだなのかと。普通科を選択することの意味付け、価値付けができていない。目標や目的を持っていない。なんとなく普通科に行って、目標を見失って、この場では残念な結果という表現を使いますが、我が校だけで年間5,000人を超える生徒を受け入れているというのが現状です。いかに目的意識を持たせるか、特色ある学校づくりをしていくかということが本当に大事だと思います。これは中学校までさかのぼってやらないと、高校だけでは解決できる問題ではないと思います。通信制高校の視点からの現状としてお伝えしました。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。5,600人という数字には驚きました。はい。それでは、澁川様、お願いいたします。

澁川氏 これまで話題として出てきた文理選択、探究的な学び、入試制度に絡めて、3点ほどお話しさせていただきたいと思います。学習指導要領が変わって、教科における探究的な学びと総合的な探究の時間における探究活動が全国的に実施され、その成果が出てきていると個人的には感じています。いろいろな学校が努力して成果として出ているところは積極的に認めて、共有していければ良いと考えています。その上で、目的意識の涵養というお話もありましたが、やはり探究の難しさとして、受験との両立の足かせのような存在に思ってしまう生徒や、やらされている感を感じてしまう生徒もいるという現場の声も聞きます。中には、自己の形成やキャリア形成に関連付けられている生徒もいると思いますし、実際に、高校での探究活動を、個人の中で大学入学後の学びに接続できる、つまり探究を通じた高大接続を実現できている生徒もいると思います。しかし、必ずしもそうではないという状況の中で、積極的に卒業生の声を生かして、生徒にとっては自身のロールモデルとなるような存在を知る、話を聞くという機会があっても良いと思っています。探究が目的化するのではなく、経験として自分の中に内在化していくような振り返り、先輩や卒業生の話を聞くなど、生徒個人の観点での活動が必要だと思います。これは、とある高校の先生から聞いた話ですが、理系の大学に進む選択をして、逆算して高校在学中は文系の探究をしよう決めて、個人の中で学際的な学びに取り組む生徒もいたそうです。このように、探究を用いることで文系・理系の垣根を超えて個人の中で横断できる場所があるのではないかと考えています。

2点目、教員の視点でお話しさせていただきます。全国的に、総合的な探究の時間をかんばっておられると思いますが、やはり限られた時間の中で、発展させていくことが難しいということがあります。そのときに大事になってくるのは、教科における探究の学びとの連携であると多くの方がおっしゃっています。もちろん、各教科の専門性も大変重要だと思っています。教科と総合的な探究の時間のバランスを考える、これはカリキュラム・マネジメントの話になってくると思いますが、文理の役割、探究の役割について、カリキュラム・マネジメントの視点で検討していったり、他校の好事例などを情報共有したりできると良いと思います。もう一つ、これは公立高校の特徴ですが、教職員の異動があるので、旗振り役として総合的な探究の時間に取り組んでいた教員が異動になった途端にそのシステムが崩れてしまうということになりかねない危険性をはらんでいると思います。ですので、長期的に考えたときに、もちろん旗振り役でがんばる教員はいると良いですが、学校文化として根付いていくような仕組み作りができると良いと思います。生徒から生徒へつないでいくことで自走できるようにしているという話も伺ったことがありますので、その先生がいないとできない、ということではない学校づくりができると良いのではないかと考えました。

3点目、公立通信制高校についてです。先ほど奥平アドバイザーから、N高校に年間約5,600人が転学しているという話を伺いましたが、やはり通信制高校の生徒はとて増えてきていると思っています。その中でも特に深刻だと思っているのが、私立の広域通信制高校と公立通信制高校の間で、教科及び総合的な探究の学びにおいて、

学習経験の格差が顕著に出ているということです。レポートで探究をさせるというのはなかなか難しく公立が苦戦している一方で、私立の広域通信制高校では、すごく特色ある活動ができています。先ほど総合型選抜の話もありましたが、探究型の入試が過熱すると、転じて、学習経験の格差や入試格差が拡大していく危険性があると思っています。通信制も含め、探究活動の充実、どう巻き込んでいくかということを考えていくことが重要だと思いました。例えば、通信制でもこんな探究活動ができるのではないかといったことを、教育委員会から現場の先生に情報提供していただくとか、また、入試の在り方についても偏りすぎずバランスを取っていただけると良いと思いました。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。具体的な課題設定、具体的な御提案をいただきました。特に通信制のお話については大変重要な観点だと思いますので、事務局としてもしっかり受け止めていただければと思います。それでは、続いて「教育環境について」に移りたいと思います。まずは事務局から説明をお願いします。

事務局 (資料4「魅力ある県立高校づくりについて～教育環境について～」説明)

依田高校改革統括監 皆様から御意見をいただければと思いますが、スライド 18 ページ、市町村立中学校卒業生数が大きく減少していく中で、県教育委員会としてどのようなことに留意していけば良いのか、特にこの辺りを中心に御意見をいただけますと幸いです。はい。船橋様、お願いいたします。

船橋氏 1点お伺いしたいことがございます。埼玉県立高校の男子校、女子校を全て共学化するというお話があったかと思いますが、それは本当なのでしょうか。

依田高校改革統括監 私の方からお話しさせていただきます。参考資料⑨として、「男女共同参画苦情処理委員からの勧告に係る措置報告書」を付けております。船橋様の御質問は恐らくこのことだと思いますが、令和5年に、男女共同参画苦情処理委員会という県の第三者機関が、県教育委員会に対して、別学校を共学化する旨の勧告をされました。参考資料⑨が、その勧告に対する報告書です。大変分量の多い資料ですので、この場では私から簡単に内容を御説明させていただきます。

県の教育委員会は、従来から共学化を推進する立場であり、今後もその立場に変更はないというのが1点です。その上で、今回、アンケートや意見聴取などで様々な立場の方からお話を伺ってまいりまして、別学校にも意義があることを理解しているところです。結論部分ですが、そうしたことから、今議論いただいているような様々な教育ニーズに対応しなければならない。また、中学校卒業生数の減少にも対応していかなければならない。共学化を推進する考えはもともとから継続しておりますので、そういったことを幅広く総合的に検討する中で、共学化を推進してまいります、というのが、報告書の概要、考え方です。男女共同参画苦情処理委員に提出したその報告書が大きく報道されたことにより、船橋様をはじめ県民の皆様のお耳に届いているのかと思います。

船橋氏 それは、県立高校は男女共学の学校のみになるという理解でよろしいのでしょうか。

依田高校改革統括監 共学校のみになるということを報告書に書いているわけではありません。

船橋氏 親御さんたちと話をする機会があり、その中で、男女別学も多様性の一つだという話がありました。例えば、男性恐怖症の女性がいることもありますし、女性が苦手な男性もいます。LGBTQのように、多様性という言葉があります。女だからこう、男だからこうということは、今は言うてはいけないことだと思います。ただ、女子校を選ぶ理由、男子校を選ぶ理由があると思います。女子校という言い方はもう古いかもしれませんが、別学校がなくなるというのは、今の時代の多様性という点にはそぐわないのではないかという思いが少しあります。

ただ、生徒数が減ってしまっているということはもちろん分かりますし、環境という意味では、いずれ校舎の維持が困難になるということも分かります。仕事柄、学校の先生とお会いする機会があります。今は学校見学、学校説明会の時期ですが、新校舎しか案内しないで旧校舎には案内しないという話を聞きました。小・中学校にはあるのになぜ高校にはエアコンが付いていない教室があるんだ、高校の教員はこんなに暑い思いをしているのに県がお金を出してくれないと。小・中学校ではエアコンもありきれいな施設で学んだ生徒は、こんな古い校舎の公立高校には来てくれないという話も聞きます。子供たちの数が減っているというのは分かりますが、建て替える、作り変えるという機会がある際には、一概に男女別学だったところを全部一緒にしましようというのは、また少し違った話なのかと思いました。私は共学校の普通科で育ったので関係ないかもしれませんが、多様性を尊重していただくのであれば、そういった選択肢を残してほしいという思いがあります。

また、もともとあったカリキュラムの中にどんどん新しいものを足していくのが現場の先生方の大きな負担になっているという話も聞きました。働き方改革はもちろん理解しております。先生方の業務はすごく多忙で大変ですし、前回、定時になったら学校は電話に出してくれないという話もしましたが、新しく入ってきたこともやらなければならない、だけでも既存のことも当然やらなければならない、更には研究もしなければならないとなると、先生方の健康が心配です。ICT教育の導入などもあって、教育環境という意味では、そういったところをすごく思いました。いつも現場の先生方には頭が下がりますが、現場の声を拾っていただきたいと思いました。

このアドバイザー会議に3回参加させていただいて思ったことが、魅力ある県立高校づくりということですが、誰に向けた魅力なのかということ。子供たちに向けたものなのか、親に向けたものなのか、社会に向けたものなのか。3回の会議を経て、そういった思いがすごく大きかったです。子供たちが行きたいと思える学校をつくっていくことが大人の考えることだと思っています。私の時代はまだ学区制があったのですが、沿線の高校はほぼ普通科でした。その中でなぜその学校を選んだのかというと、やりたいことがまだなかったということもありますが、私は部活動で決めました。夏休みの学校説明会でこの学校に入りたいと思って入学し、そこで学ぶことも大きかったです。普通科はやりたいことがない生徒が行くところ、という風潮もあるかもしれませんが、逆に無限の可能性もあるのも普通科だと思います。この学校の普通科ではこんなことが学べるということをもっとアナウンス、広報していくことで広がっていければいろいろなことにつながっていくのではないかと思います。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。今のお話の中で、魅力とは誰に向けた

魅力なのかという点について、事務局の考えはいかがでしょうか。

事務局 おっしゃるとおり、一番は、子供たちの学びの場である学校は子供たちにとって魅力ある学校であるべきだと考えております。その上で、時代が変わっていく中、社会に求められるもの、これから生きていく上で必要になるものという観点をしっかり意識しながら、子供たちに提供できるものを考えていく必要があると考えています。当然、保護者や社会の理解も必要になってくると思いますが、第一は当然、子供たちにとって魅力ある学校にしていくことだと考えています。

依田高校改革統括監 皆様それぞれのお考えがあるかと思いますが、事務局としてはそのように考えているということです。また、今回の報告書に関しては、いただいたお考えがあることは重々承知しているところです。少子化が進む中で、あるいは様々な教育ニーズに応じていく中で、男子も女子もどちらにも異なることなく、いかに平等な教育機会を確保するのか、今回の会議の中でも私の念頭にあったものです。船橋様の御意見はしっかりと受け止めさせていただきたいと思います。その他、いかがでしょうか。はい。渡辺様、お願いいたします。

渡辺氏 共学化について、私の専門に近いところですので、一言お話しさせていただきます。私は船橋アドバイザーとは少し違う考えを持っています。この社会はいろいろな性別の人たちが共に暮らしていますので、前提としては、そういう同じ空間で違う人たちと関わりを持ちながら学んでいくことが重要だと思っています。それが多様性の尊重につながるもので、そこで多様性について議論していくものだと考えております。

20年くらい前になりますが、他県で共学化した学校のその後のことを調査したプロジェクトに関わったことがありました。非常に面白かったのですが、女子校が共学化して入った男子たち、もしかしたら男子集団の中でははじかれてしまうような静かな男子たちが、すごく楽しそうに体育の授業を一緒にやっていた姿もありました。一方で、もともと女子校だったので女子のエンパワーメント、自立を進めていくという意義もありましたが、女子校時代にあったそういったイベント、文化祭での出し物などが見られなくなってしまったという残念なこともありました。一方、男子校が共学化したときに、女子生徒が生徒会長に立候補したところ、男子集団がすごく反対運動を始めたということもありました。

今回の報告書でも、伝統や校風を大切にしたいという別学校の生徒や保護者の声がありましたが、アンケートでは見えないところとして、それがどんな伝統なのか、どんな校風なのかということをもっと明らかにする必要があると思います。そこにジェンダー平等やセクシュアリティ平等に問題があるのであれば、本当にその伝統は保ち続ける必要があるのかということをもっと議論していかなければならないと思っています。それから、先ほども、男性恐怖症や女性と関係をうまく作れないなど、個人個人では男子校、女子校に入りたいという人もいます。学校を出た後は、私たちはみんなこの社会で生きていきますので、多様な人がいる中で関係性を考えていくことが重要だと思いますが、そもそも、埼玉だけでなく、日本はジェンダー平等、セクシュアリティ平等を学ぶ機会が本当に少ない、弱いということが根本にはあると思います。別学であれ共学であれ、探究の時間と絡めて、いろいろな人たち、多様な

仲間たちと語り合いながらそこをしっかりと学ぶということは、十分にできることだと思います。また、教科における探究的な学びと総合的な探究の時間の学びを結び付けていく。ジェンダー平等、セクシュアリティ平等についての学びはいろいろな教科でできるので、自分たちの生活につながっていく、社会の平等につながっていくすごく良いテーマだと思います。なかなか教科として指導できる先生も少なかったりしますが、埼玉県教育委員会はジェンダー平等、セクシュアリティ平等にすごく力を入れているので、その辺をつなげていけると、埼玉県の高校はどこも魅力ある学校だねということになると思います。

船橋氏 先ほどお話ししたのが、全て共学校になるのかという親御さんからの話です。今は報道やニュースだけが独り歩きしている状況かと思います。その根拠が多くの方に伝わっていない現状があるかと思います。どうしてこう考えてこういう結論に至ったのか、その中身が親御さんに伝わっていません。その点がアナウンス不足なのだと思います。PTA活動も最近はアナウンス不足でいろいろな御意見をいただくことが多いのですが、アナウンスが一般家庭までしっかり伝わるのが、難しいですが一番重要だと感じます。県教育委員会には、もっとアナウンスをしっかりといただければと思います。

奥平氏 本日は沖縄の本校からオンラインで参加させていただいておりますが、実は今日も240人くらいの生徒が全国から来て活動しています。多様性について、一言述べさせていただきますと、多様性は創り上げるものではなく、この世の中、我々が生きているところが多様性なんです。これを創り上げなければならないところが、教育の誤りではないかと私は思います。我が校は、東大、京大を受験する生徒から、小・中学校時代不登校だった生徒まで、一緒になって今も勉強しています。勉強自体はICTを活用して個別最適化していくとして、勉強以外の部分で人として学ぶことは、まさに社会そのものだと思っています。我々の通信制教育というのは、教育の中でも片隅に置かれるものかもしれませんが、そういった意味での多様性というのは、我々の中では日常であり普通です。創り上げるものでもなんでもありません。コミュニケーションを含め、子供たちはそういう力を持っていると思っています。そういう意味では、男女別が良いとか一緒が良いとかそういう議論ではなく、多様性は創り上げるものではないというのが、私の考えです。実際に今もそうですが、北は北海道から南は九州まで生徒が一緒になって活動している姿を見れば、これが世の中そのものだと実感できますし、私は毎日実感しています。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。男女共学化については、様々な御意見があるところかと思います。様々な御意見に耳を傾けながら、対応してまいりたいと思っております。引き続き、御意見を伺ってまいりたいと思います。それでは、江原様、いかがでしょうか。よろしくお願いいたします。

江原氏 中学校教育は大事だと日々感じているところですが、これまでの話を聞いて、ますます責任が大きいと感じました。子供たちの多くは、中学3年生になって初めて自分の希望で自分の進路を切り拓いていきます。公立・私立という選択もありますが、やはり普通科なのか専門学科なのかという二択から選ばなければならないということが大きいです。先ほど、限られた時間の中で探究活動がなかなか難しいというお話が

ありましたが、子供たちはすごくよくやってくれて、楽しそうに、地域も巻き込んでうまくやっています。しかし、どうしても入試となると、5教科の数字を上げなければならないということになります。高校でどんなことをしたいのかということもまだはっきりしておらず、とりあえず評定平均 4.0 がほしいとか、4.3 がないと入れないんです、そこを突破すれば大学まで視野に入ってくるんですということ言われます。私立高校の受験を考えると、2学期までに中学校で学ぶ内容を終わらせないと間に合わないという現状があります。その辺は、制度が変わってくると良いと感じます。また、その二択を迫られて入学した子供たちも、やりたいことや目標を持って高校に入学するのですが、その1年後には理系・文系に割り振られる現状があり、まだ早いのではないかという思いを持っていましたが、しかし実際は教科書供給の関係で1年生の6月くらいから希望調査があるというお話を聞いて、そうするとその時点ではやはり、とりあえず、ということになってしまうのだと思います。

好きな教科と得意な教科とやりたいことが一致していれば良いですが、なかなかそうはいかないので、やりたいことの中で自分の得意を見出していければ良いのかと個人的には思っています。とりあえずということで進みながら自分の道がだんだんできていって、本当にやりたいことは何なのかを探していく、ということになると思います。昨年度、私の教え子が本校に講演に来てくれました。その教え子は、高校では部活動で活躍し、大学に進学し、そこで自分は本当は何がやりたいのかと悩み、バックパッカーとして海外を周りながら様々な経験を通して、自分はものを作ることが好きなんだということに気付いて、農業を始めました。一から農業を始めることはなかなかハードルが高かったようですが、現在は人を雇ってやるような、なかなかの大きな企業になっています。その教え子が、「自分は回り道をした」と言っていました。決して回り道ではないと思いますが、もしかしたらもっと早くに気付ければ何か違ったのかもしれないのではないかと考えます。

教職員を取り巻く環境についてですが、益川アドバイザーの御講話で、調べ学習ではとにかくデータ収集に終始してしまうというお話がありましたが、今の教員にも当てはまる場所があります。ネットの中から自分の授業に有効な資料を引っ張って、切り張りして、有効な授業モデルをそのままコピーしてやっているということもあり、それではダメだという話をしています。本校では教員数が比較的多く、各教科や若手などで集まりディスカッションをしている時間があります。とても有意義な時間だと思います。なかなか全員の参加は難しいですが、そういう時間が教員にとっては大事だと思うのですが、もちろん働き方改革も大切で、進めなければなりません。そこを削られてしまうと、子供たちにはただ膨大な資料だけが授業で提供されてしまうということにもなります。そういう状況の中で、勉強は塾で進めるということも正直なところあり、とてもつらく感じます。学校が小規模化し、教員が研修に出にくい中で、対面で話を聞いたり議論したりする時間が少なくなっている現状をなんとかしないといけないと思っています。昨年度も旅費をやりくりしながら、初任者を他県の先進校に連れて行きましたが、やはり刺激を受けて帰ってきます。参考文献を買ったり、次も別の学校に行きたいなどの声も上がりました。そういった、教員がわくわくするような環境を作っていくことが大事だと感じました。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。それでは、萩原様、よろしくお願いいたします。

萩原氏 先ほど、誰に向けた魅力なのかというお話がありましたが、もちろん私は子供たちのための魅力づくりだと思って参加しています。今日のお話の中で少し心に引っかかったのが、入試もそうですが、中学校も高校も、学校が忍耐力を付けることを重視しているということです。中学校の入学説明会でも、最初に「中学校は忍耐を学ぶところです」という説明がありました。高校でも、一般入試をがんばる生徒は推薦入試を受ける生徒よりも忍耐力があると見なされる風潮があるんだということを感じて、そんなに忍耐力を一番大切にする必要はあるのかと思いました。もちろん忍耐力は大切だと思いますが、もっと楽しくて、子供たちがわくわくできて、先生も楽しく授業ができる、そういう空気感の中で子供たちが育っていくことが大切かなと思っています。奥平アドバイザーのお話にもありましたが、子供たちがわくわくするものをたくさん与えて、その中で子供たちがやりたいことを見つけて、子供たちが本当にやりたいことを見つけたときは、自然にすごく深掘りして学んでいく力があると感じています。深掘りしていく中で、教科を横断して学びます。入口は狭かったとしても、その先はすごく広いです。自分の得意分野から入ったとしても、それを深掘りしていくときに違う分野を学んだりする中で、自然にいろいろ大変なことを我慢しながら自分の目的を達成するための忍耐力を付けていく、そういう順番もあるのかなと思いました。ですので、やはり入試が目的になってしまうと忍耐が先に来ってしまうと思いますが、子供のやりたいこと、わくわくすることが目的として先に来ると、それに引っ張られて忍耐力が付くのかなと感じました。

また、今のシステムの中で、学校の先生たちはものすごくがんばって生徒たちのためにやってくださっているということを日頃から感じており、有り難いと思っています。ただ、先生たちも限られた時間の中で、お休みも犠牲にしながらすごくがんばっていらっしゃるの、先生ももっと楽しめるような、例えば1ヶ月に1回は違う企業に研修に行くなどの機会があると良いと思います。学校だけの世界の中ではなく、外にある企業などに研修に行く機会を持つと、先生たちの視野も広がるでしょうし、そういう先生たちは子供たちからの信頼を得るでしょうし、生徒たちももっと関心を持って話を聞くのかなと思いました。制度的には難しいのかもしれませんが、理想としてはそういうことができれば、子供たちにも良い影響があるのではないかと思います。

依田高校改革統括監 大変貴重なお話をいただきありがとうございます。それでは、小栗様、これまでの議論を踏まえて、御意見をいただければと思います。

小栗氏 意見、質問、提案など、いくつかお話しさせていただきます。今の議論になっている教育環境についてです。私は臨床をずっとやっているの、私が臨床で関わる子供はなかなか学校生活に適応できなかつたり、困難を抱える子供がほとんどですので、いくつかの高校が統合して魅力ある高校になるのは良いと思うのですが、その地域のあまり勉強が得意ではない子供たちが行く学校がなくなる、あるいは選択肢が狭まってしまおうという問題が、恐らく起こりつつあるのではないかと、肌で感じています。統合した際により良い学校につくりかえるというのは当然良いことだ

と思いますが、例えば資料 18 ページに「県立高校の活性化」とあり、「適正な学級規模を下回ると活性化できない」という趣旨なのかと思いますが、果たしてそうかなと思うところもあります。今ある学校を魅力的なカリキュラムにしていくことで魅力ある学校につくりかえることもできると思いますし、小規模になってしまった学校は、小規模でしかできない学び、そこで魅力を出していくということもできなくはないのかなと感じたところです。子供の数が多くないと活性化しないかと言うと必ずしもそうではないと思いますし、宮代町教育長の中村アドバイザーや中学校長の江原アドバイザーもいらっしゃいますが、中学校の中には小規模校もあると思います。その中学校が活性化していないか、活気がないかと言うとそんなことはないと思うので、単に子供の人数を増やして活性化しようということではなくて、減るなら減るなりに活性化していくという方向性も一つあるのではないかと思います。また、そういった魅力的な学校になると、どうしても人気が出てしまい、探究的な学びもそうですが、魅力的な学校というのはカリキュラムが魅力的ということだと思うので、そういう意味で言うと、勉強があまり得意ではない子供たちこそ、そういった学校に通わなければいけないけれども、人気が出過ぎてしまうとそういった子供たちが通えなくなってしまいう問題があります。本当はそういう教育を一番享受しなければならない、享受すべき子供たちに享受できなくなってしまいうということもありますので、その辺り、取り残さないという視点も含めて考えていただければと思います。

関連しますが、益川アドバイザーから御講話いただいた探究的な学びについてです。探究的な学習という方法を取るときに私が気になるのは、低学力の子供たち、勉強が苦手な子供たちです。そういった子供たちでも探究的な学習という方法は取れるものなのか。あるいはそういった子供たちにとっては、学校適応という観点においては受け身的な学習の方が良いということはないのか。要は、探究的な学習を取り入れたがゆえに高校中退が増えました、追いついていけない生徒が増えましたでは、あまり意味がないかなと思っていて、全体に目を向けるということが必要なのではないかと思います。と同時に、一方で、専門学科の話もありましたが、専門学科については、探究的な学び抜きには成り立たないと思います。新しい学びを取り入れるということももちろん大事ですが、従来から専門学科で行われているカリキュラムの中には、いわゆる探究的な学習に位置付けられるものもあるのではないかと思います。そうした視点から、これまで行ってきた自分たちの教育方法を一度整理してみて、どこが足りないのか、どこを補充すれば探究的な学習として成立するのかということを考えているということも大事なのではないかと思います。

最後に、問題になってくるのはそれらの評価だろうと思います。評価は大学入試にも関連しますし、「学ぶ力を身に付けました」というところをどう評価していくのか。高校教育の中で評価というと定期考査がありますが、考査の中で「学ぶ力を身に付けたか」どうかは、なかなか評価しづらいのではないかと思います。そうすると、ルーブリック評価などになってくると思いますが、それが大学入試にどう結び付いていくのか。総合型選抜の話題もありましたが、何かのテーマについて深い関心を持って探究できる子供は学力がすごく高いのだろうと思いますし、総合型選抜の本来の趣旨は、いわゆる一芸に秀でた生徒や、特定の分野について探究した生徒を受け入れるという

ことだと思いますが、本来の趣旨のとおり総合型選抜を活用できている生徒は恐らく上位数%程度しかいないのではないかと思います。例えば、数学オリンピックに出ましたとか、そういうことをもって総合型選抜で受験する生徒は限られ、年内に進路を確定させたいとか、一般入試までもつれたくないという生徒の選択肢になってしまっているのではないかと思います。探究的な学習が、評価として総合型選抜にきちんとリンクしないと、学校教育として根付いていくのがなかなか難しい気がします。その辺りは今後の課題なのかなと思います。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。大変貴重な御意見をいただきました。2点目の御意見、探究的な学びが、いわゆる学力があまり高くない生徒、勉強が苦手な生徒にとってはどうなのだろうかという御質問も含めた御意見だったかと思いますが、益川様、この点はいかがでしょう。

益川氏 なかなか難しいところだと思いますが、どんな学力の生徒であっても、知りたいことを持つことができれば、力強く探究することができるので、そういう環境をどう用意してあげられるのかということが大事になってくると思います。

依田高校改革統括監 小栗様、いかがでしょう。

小栗氏 ありがとうございます。カリキュラムを含め、そういった環境を用意してあげることが大事だと思いました。

依田高校改革統括監 はい。それでは、服部様、お願いいたします。

服部氏 「教職員を取り巻く環境はどのようにあるべきか」、「再編整備を検討するにあたり、どのようなことに留意すべきか」という二つの論点について、私なりの考えをお伝えさせていただければと思います。まず、教職員を取り巻く環境としては、教員のなり手不足や、若手だけではなく教務主任や学年主任などのミドルリーダーや管理職候補者を含めた人材育成などの課題があります。育成指標もあり県はその活用を促していますが、校内でどのように人を育てていくか、その辺の制度化やノウハウの共有など、校長としては、教員の育成について更に現場を支援していただけると有り難いです。採用についてですが、本校は場所的になかなか教員が集まらないという実情もあるので、定時制の学習サポーターについては、全日制で教育実習をこれからやる学生、もしくは既に実習を終えた学生にフォローしてもらっています。定時制の学習支援をしてもらうことと並行して、教員採用試験に向けて学校を挙げてサポートしています。専門学科の教員を志望する人材が少ない中、本校の場合は専門分野を更に深める大学に進学して教員を目指す生徒がいるので、そういった人材の発掘や採用試験に向けたサポートなど、卒業生の先の進路まで支援することも、県立高校に与えられた使命と受け止めています。

再編整備を検討するに当たり、本校のように、地域の期待に応える、地域とともにある学校があっても良いし、専門性をより高める学校があっても良いし、魅力ある学校としてブランド力を高めるためには、教育課程や学校行事、部活動など様々な要素があると思います。この辺は、学校と設置者である県との間でしっかりと議論していく必要があると思います。

依田高校改革統括監 ありがとうございます。それでは、以上で協議を終了させていただきます。

6 欠席アドバイザーからの御意見

柿沼光夫氏

- 大学入学を目指す生徒もそうでない生徒にとっても、これからは教科横断的な学習が必要である。単に調べ学習ではなく、教科の枠組みにとらわれずに自ら課題を見つけ解決することで達成感を得らえるような探究学習の機会があると良い。そのためには、デジタル化を進めながら、プロジェクト型学習などを、普通科の中にコースや選択で取り入れられると良い。
- 地域の企業や団体と連携しながら、子供たちが社会に出て様々な課題にぶつかったときにそれを解決できる力、社会で役に立つ力を身に付けられると良い。そのためには、小・中学校で学んできたことを高校でも繰り返し学ぶのではなく、「学び方が身に付く」ことが大事である。
- ゴールを設定し、そこに到達するプロセスは生徒にそれぞれに任せる、という学び方も一つの手法としてあるのではないか。一人で進める生徒、先生をうまく利用しながら進める生徒、友達と相談しながら進める生徒、どんどん進める生徒もいれば、つまづいた生徒はそこで戻りながら取り組める。様々な生徒に対応した学びは、これからの時代に絶対に必要である。
- 他県の例も参考にしながら、例えば国際的なコミュニケーション能力やデジタルコンテンツ制作のスキルを身に付けられる学びに特化するなど、6年間のゆとりを持って学べる特色ある中高一貫校の設置を検討いただきたい。
- 中学校卒業生数が減少する中で、県立高校の再編整備はやむを得ないと思う。一方で、地域に大きな影響を与えるので、特に県北など、残せる高校はあるのかということを検討することも必要ではないか。どうしても人口に偏りがあるので、県南の生徒たちにとって北上することが魅力に感じるような高校を県北に、という考え方も取り入れてもらえると良い。

岩田輝子氏

- 教科等横断的な学びは、教職員の学びにもなるし、生徒にとっても様々な学びに広がる。効果的に取り入れることは非常に良い。探究活動も含め、様々な事例を共有できれば、教員の資質・能力の向上につながる。各市町村の特色ある取組の活用や高校間連携も進められると良い。
- 各学校の実情に合わせて探究の仕方のベースを作り、それに則って進めていければ、勉強が苦手な生徒や外国籍の生徒など様々な生徒が在籍する学校においても、生徒は自ら考えて発言し、まとめる姿勢が身に付く。また、大学進学や就職など生徒の多様な進路希望にも対応することができる。
- 教員が学校の外に出て研修に参加し、新しいものを得てそれをどう学校に還元できるか。本校には高い指導力を持つ教員もおり、そういった教員の好事例など全県で共有し、実践に結び付けていければ良い。
- 小・中・高・特別支援学校に関わらず、全ての子供たちが皆平等に、等しく同じ教育を受けられる環境が大事。小・中学校では当たり前だった施設・設備が、県立高校

に入学すると当たり前でなくなるという状況は望ましくない。また、特に多部制定時制高校などでは、登校時間や授業時間が生徒によって異なるため、自分のペースに合わせて学べるような学習環境があると良い。

- 小規模校だからこそその良い学びもあると思うが、様々な人との関わりを学ぶという観点を踏まえると、ある程度の学級規模があった方が良いとも思う。地域の人口減や施設のキャパシティ、教職員定数と業務量のバランスなど、様々な要素を考慮していく必要があるのではないかと感じる。

川邊友子氏

- 大学入試と探究活動の両立が難しいと感じる。総合型選抜で探究活動の取組を評価してもらえ、大学が増えてきているが、数はまだ少ないので、大学入試制度も一緒になって変わっていくのが望ましい。一方、社会に出て自立して生きていくために、自分で考えて動く、周囲の状況を見て判断して課題を見つけることができる力は必要で、そういった力を身に付ける上で、探究活動は有効である。
- 探究活動を進める上では、生徒の基礎学力もやはり大事である。自分の考えを自分の言葉で相手にしっかり伝えるための語彙力、基礎学力や読み書きの部分を身に付けさせるため、教員が声掛けしつつ、コミュニケーションが取れるように進めていくことが大事である。
- 生徒一人一人に寄り添いサポートする面倒見の良さがこれからの県立高校に求められる。経験豊かな教員の若手教員への助言や積極的に声掛けをして風通しの良い職場環境づくり、あるいは生徒のキャリア教育に教員も積極的に参加していくなどの機会を通じて、コミュニケーション能力をはじめ、教員の資質・能力の向上が必要である。
- 外国籍の生徒とスムーズにコミュニケーションが取れる翻訳ツールや教員用タブレット、デジタル採点ツールや校務支援システムなど、授業の質の向上や業務の効率化の観点から、ICT技術を効果的に活用できるよう環境整備していただくと良い。
- 学級数が少ないと教員の人数も少なくなる。4クラス規模の学校では、一人の教員が二つの分掌を担当したりしてかなり大変だった記憶があるので、6クラス規模程度がないと難しいところもあるのかと思う。8クラスくらいあると、学校行事でもかなり盛り上がるし、できることも増えるのかなと感じる。

中川未来氏

- 基礎的な学びをまず大事にした上で、将来の職業選択につながるものや生徒の興味関心に応えるような選択科目を増やすなど、可能な範囲で普通科も特色化していくと、対外的には良いアピールになる。一方で、教員の負担増につながるため、単純なプラスアルファではなく、外部などに委託できる業務は委託するなどの働き方改革や人材の確保が必要である。
- 大学受験で一般入試を利用する生徒の減少が見込まれる中、探究活動を一つの学び手法としてしっかり取り組むことが重要である。課題解決の一つの学び方という視点を持って教育活動の中に組み込んでいくことで、決して受験勉強への足かせにならず、プラスの効果を得られると考える。

- 様々な教科の教員が集まって授業の内容に踏み込んだ情報交換や研修によるノウハウの共有、シラバスを有効に活用して他の授業の内容と時期にアンテナを張りながら、自身の授業を組み立てるなど、教科横断の視点を持って取り組んでいけると良い。
- オンラインを活用した様々な交流の機会が増えてきているので、例えば海外の学校とのオンライン交流の時間に各グループでブレイクアウトした際に、音を聞き取りやすいように活用できる個別のブースなど、学び方や交流の仕方の変化に対応した環境づくりができると良い。
- 男女共同参画苦情処理委員会からの勧告とそれに対する措置報告書については、当事者を置き去りにしていると感じる。また、性別を理由に希望する学校に入学できないのは差別だというのは理解できるが、実際に現在の別学校が共学化したら、その学校が培ってきた文化や伝統が維持できないことは確実で、そういったマイナス面があることに賛成なのか、疑問に思う。